

# 地球化へどう対応していくのか

松園万亀雄

総合研究大学院大学教授地域文化学専攻／国立民族学博物館長

ケニアを旅行した人は、土産物屋でソープストーン（滑石）の彫刻を見たことがあるにちがいない。この石彫の製作者は、私が30年近く調査のために通いつづけている西ケニアのグシイの人たちだ。彫刻のモチーフは、実用品や動物、抽象的な人物像などであるが、驚いたことに、80年代に入ってから、それらの中にまじってクジラやイルカの石彫が出回ようになった。石彫を調べるようになってわかったことだが、それは、なんとイヌイット文化の影響であった。

NGO活動の一環として、マッギル大学の教授などカナダ人がグシイの彫工たちに協同組合のつくりかたを教えにやってきたのがきっかけだった。そのときに、ケベック州のイヌイットの彫工たちが同行していたのである。かくて地球上遠く離れた民族間で作品のモチーフの交流がおこなわれ、以来、イヌイット、グシイのそれぞれ相手国への行き来がはじまった。

一方、ケニアで木彫といえばカンバ人の独壇場であるが、そのカンバ人の一部が、マホガニーや黒檀などの材料不足、高値のために木彫をあきらめ、木彫用の道具をそのまま使って、今ではグシイの土地で石彫をやっている。

このように、現代では、国内で、あるいは国境を越えて、かつては予想もできなかったような人と文化の交流が起きている。グシイでみられたケースは、そのほんの一例にすぎない。

## 「地球化」の中での異文化理解

文化は土地に根づいているものと、一般に考えられてきた。だから、「土着文

化」という言いかたがある。文化だけではない。社会も民族も、他からはっきり隔てられた一定の空間を占めているものと理解されてきた。世界は国の集まりであり、たいていの世界地図は国ごとに色分けされている。国境の内側に「インド文化」があり、「ガーナ文化」がある。旅行者はインド国に行って「インド人」に話しかけ、「インドの文化・社会」を見聞する。「一定の空間」はべつに国でなくてもよい。文化人類学者にはおなじみの、もっと単位の小さな「部族」や「民族集団」も同じことだ。冒頭に述べたグシイ人はケニア西部のグシイランドとよばれる地域に住んでいる。

ところが文化人類学（以下、「人類学」と表記）でも他の人文社会科学でも、近年、文化の枠組みに対するとらえ方がちがってきた。いわゆるグローバリゼーション（以下、「地球化」と表記）の議論である。人類学では1990年代、主として、90年代後半から、「ローカル／グローバル」「地球

化」「トランスナショナル」などの用語を使ったおびただしい数の著作がアメリカで出版された。

欧米諸国では、第三世界から大量の移民を受け入れた結果、国民国家としての存立さえ危うくなってきたと感じる人々が時折、過激な排外運動を起こしている。市民権、納税、国旗と国歌、社会福祉、徴兵制、国の祝祭と祭日など、国民国家としての文化的な同質性をささえてきたさまざまなしくみが機能しにくくなっている。移民たちは故国との関係を絶っているわけではないし、今いる国がさらによそに移るための中継地点にすぎないことも珍しくない。地球化が意味するのは人の移動だけではない。資本、もの、思想、倫理観、生活慣行、映画・印刷物・衣装などがもたらすシンボルとイメージ、その他もろもろである。

ここで、翻ってわが国を見ると、その良し悪しは別にして、欧米にくらべて日本の国際化・地球化への足取りがモタモ



イヌイットの石彫。イヌイットは約4000年前からカナダの極北で暮らしており、狩猟・漁業を中心とする独自の文化を培ってきた。

タ、ギクシャクしていることは周知のとおりである。とくに移民の受け入れには高い障壁をもうけているし、国内の難民(移民)への配慮も十分ではない。その結果、私たちは国内において外国産のものをふんだんに使用し、舶来の芸術・娯楽に頻繁に接しているわりには、異文化の人々と直接に知り合う機会は欧米人にくらべて極端に少ないというアンバランスな状況にある。

地球化の進行につれて、土着文化は人の移動を介して土地から引き離され、新しい別の文化的土壌のなかに挿こまれ再土着化している。この意味でも、地球化は欧米文化が一方向的に第三世界の文化を侵略し覆いつくしてしまう動きだとみるのは短絡的すぎるだろう。文化が別の土地に入るときには、その土地の文化によって再解釈され、受け手の条件にあわせて使用・流用され、意識的・無意識的に誤用されることは、これまでの多くの研究が明らかにしていることである。さらに、地球化の現象は、欧米文化と第三世界の文化との融合と葛藤の過程だけでなく、たとえば東アジア圏、東南アジア圏、中東地域圏など、欧米から離れた地域圏の内部で、また相互間で展開されている現象であることも忘れてはならない。地球化はひとことだけでいえば「時空の圧縮」効果をもたらしているのである。

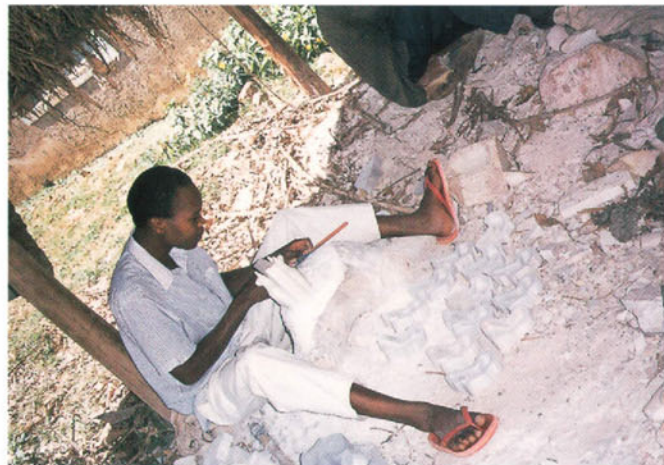
#### 新たな研究分野の開拓を目指して ——発足予定の四つの機関研究

世界の人類学も日本の人類学も、上記のような地球化の動きのなかで歴史学・社会学・言語学・政治学・国際関係論・地域研究など諸学の研究者と連携しながら、時代にあった新しい研究分野を開拓していかなければならない。

国立民族学博物館では、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として出発する平成16年度から、以下のような四つの機関研究を発足させる予定である。

①「社会・文化の多元性」：文化や人口の越境と定着（再土着化）過程をめぐる社会性と関係性の研究。

②「人類学的歴史認識」：急激で不均



滑石で彫刻するケニア・グシイ人。80年代以降、遠く離れたイヌイットとの間で、彫刻文化の交流がおこなわれてきた。

整な現代の文化変化と過去の文化変化との比較、変化しにくいコア文化は何か、現代と過去をふくむ歴史叙述の方法、家族・婚姻など基本的な社会制度の変容と適応、多文化価値を内在させた個人の適応、などの問題を手がかりに長い歴史時間のなかで現代を問い直す研究。

③「文化人類学の社会的活用」：人類学が公共政策に役立つ実践的な知を提供していくこと、すなわち開発事業や行政と連携するための有効な方法、日本国内の外国人、過疎化現象、高齢者の生活、生殖医療、戦後家族の変容、など国と地方行政、民間団体の活動に役立つような研究と連携方法の探究。

④「新しい人類科学の創造」：人類学の対象の質的变化と現地調査の方法の変化がもたらした意味と、比較・相対性・文化・社会などの基本概念の再検討をおして、時間軸と空間のなかでヒトとその身体的・文化的属性の特性の変容を探究し、人類学を含めた包摂的な人文社会学のなかで統合的な人類科学を構想する研究。

なお人類学研究では、上記のような課題を追求するにしても、基本的には現地調査(フィールドワーク)での体験と知見がいちばん大切であると私は考えている。それに基づかない研究は、言葉だけが華々しい、空虚な抽象論になってしまうにちがいない。

たとえば、現今の人類学者であれば、現地の住民とまじわり、聞き取りをしながら、同時に歴史文書、公文書、開発援助関係の報告書などを参照しない者はいないだろう。世界中のどこの社会でも、たとえ辺鄙な地方の農村や遊牧キャンプであっても、植民地時代と国家独立後の過程のなかで多様な外来の要素が入りこんでいる。すなわち、地域文化の多面性と歴史的な変容過程をよく知るためには、外側の世界がもたらしたさまざまな変化要因を考慮しなければならなくなっているのである。

急速に変化する世界の中で、人類学もまた大きく変わらなければならない。変貌する人類学の一端をこの特集でみてほしい。



松園万亀雄(まつその・まきお)

大学入学後まもないころから、当時院生だった故・野口武徳さん(日本の漁村の研究に貢献)の腰巾着よろしく、彼の国内調査についてまわった。野口さんに「君はいいフィールドワーカーになる、人類学に向いている」とおだてられた。野口さんを通してその世代の人類学者や先生たちを知るようになり、ごく自然に人類学の道に入ったようだ。当時は、小説のほか、旅行記・探検記・伝記・ノンフィクションをよく読んだが、人類学の学説史も人物誌として書かれたものを読むのが好きだった。それは今でも変わらない。